



利根町に移住して17年。現在は奥さまと二人のお子さんとの4人暮らし

その後持ち主の方と出会うことができ、この古民家を借りられることになり、奥さまと約一年をかけて改修と片付けを丁寧に行い、2004年に利根町での生活がスタートしたそうです。



土間から続く台所。井戸水を使用しているため、自然と環境の事を考えるように。「ここではエネルギーを極力使わずに生活できるので、昔ながらの生活をするための条件が整っている感じがします」

「この辺りには江戸時代の道もたくさん残っていて、例えばこの道を家康が歩いたんだな…とか、もしかしたら勝海舟が通っていたのかもな…とか、そういう事がリアルに感じられるのはすごく素敵な事だと思っています。」

### 稲作を始めて地域との関わり方に変化

古民家で生活をしていく上で、土壁の修復のために藁が必要になった中村さんは、稲作に挑戦しようと考え始めます。農業の事は右も左もわからなかったため、なかなか踏み出せずにいたそうですが、近所の方の協力もあり2008年に田んぼを借りて稲作を始める事ができました。この事が中村さんにとって、地域との関わり方を変える大きな転機となりました。



道路沿いにある田んぼ。この立地のおかげで、よく声を掛けてもらえて救われている

農業用の機械がなかったため、全て手作業でのスタート。「最初、田んぼの事が何もわからなくて。どうやら、まずは田んぼというのをやるらしいという事がわかったので、一人で何とかやっていました。そして、近所の方が声を掛けてくれて。道具の使い方やコツを教えてくださいました。」

中村さんが借りている田んぼは道路沿いにあるので、通りかかった人に「大変だね」「ずっと気になってたんだ」など、よく声を掛けてもらえるそうです。

「田んぼが奥にあつて誰にも声を掛けられなかったら、たぶんめいっちゃってたと思います。稲作を始めた事で、近所の方がちよつと応援してくれているような感覚があつて。田んぼのおかげですごく救われています。」

農作業はすべて手作業で行うため、田植えや稲刈りの時には友達家族が30人くらい集まり、子どもたちも一緒に手伝っています。毎年一月には、手伝って

### 草茅舎の開設と「文間楮利根町で育てる紙ノ木プロジェクト」

2010年に立木にある旧青年研修所だった建物の一室を借りて、掛軸や屏風などの制作ができる工房「草茅舎」を開設した中村さん。掛軸や屏風などの「表具」と呼ばれる日本の伝統が、近年衰退してきているといいます。

「そういうものは廃れてはいけないんじゃないかなという想いもあつてこの工房を作りました。」

草茅舎では、藝大の大学院生たちに屏風の作り方を教えたり、講習会を開いたり、さまざまな事を行ってきました。

草茅舎があるスタジオの敷地内では、和紙の原料である楮が栽培されています。2011年に始まったこのプロジェクトは、中村さんが代表となり、那須楮という品種の苗を180本移植して栽培し、枝の刈り取りや皮を引く作業を行い、新潟県の和紙屋さんへ渡してもらって和紙を完成させる活動です。

このプロジェクトを続けている事に加え、日本画の材料や道具について専門的な知識を持つ中村さんの中には、紙にまつわる出会いが多く舞い込んできました。上野寛永寺の葵の間の障壁復元や、目黒雅叙園の天井の修復なども手がけてきました。

明治天皇のお使いになった、世界遺産日光二荒山神社の北岳南湖閣の障壁修理プロジェクトでは、利根町で育てた和紙を使用しました。「こういうプロジェクトでは和紙をたくさん使うことになるので、こうした活動がきっかけとなって和紙の良さが見直されて活用につながっていくのは良いなと思います。」

### 和紙は記憶の装置

パルプを原料とした洋紙の寿命は数十年から百年といわれる一方で、和紙の寿命はなんと千年。現存する最も古い和紙は、約1300年前の戸籍の記録だそうです。



楮の枝の中には繊維が詰まっている



プロジェクトに参加する方が手作りした道具。白皮に仕上げる時に使う



白皮にして乾燥させたもの。この状態で新潟県の和紙屋さんへ



完成品。栽培からすべて手作業で行われている貴重な和紙

### 文間楮－利根町で育てる紙ノ木プロジェクト

中村さんが代表を務めるこのプロジェクトは今年で11年目。立木にあるARTONE ART STUDIO(アートネアートスタジオ)の庭で2011年に始まりました。

現在、和紙の原料となる楮を180株栽培しています。冬になると刈り取りを行い、蒸して皮を引き、乾燥させたものを新潟県の門出和紙の工房で漉いてもらい和紙が完成します。

国産楮の栽培量が減少し、市販されている和紙の大半が外国産が占めるようになった近年では、貴重な活動となっており、スタジオを利用しているアーティスト達や協力団体のみなさんでこの活動を続けています。



江戸時代にはほとんどの庶民が知っていたという霊獣を描いた作品



古民家に残っていた樽の一部を利用し、利根町史の話を中心に描いた作品

れた人々を誘って、自宅の庭で餅つき大会をしたり、育てている大豆で味噌を作る時も、4〜5家族が集まって一緒に行うそうです。手作業で手間と時間をかけるからこそ、仲間や子どもたちと一緒に集まる機会が自然と生まれています。